



伊豆箱根鉄道株式会社

代表取締役社長

中村 仁氏



プロフィール

昭和35年5月22日生まれ、千葉県出身。昭和58年に成城大学経済学部卒業後、西武不動産株式会社に入社。平成22年西武鉄道株式会社 取締役上席執行役員 鉄道本部計画管理部長を経て、平成24年5月に伊豆箱根鉄道株式会社 代表取締役社長に就任し、現在に至る。

人の営みを感じる まちの「香り」を大切に

地域で長年、市民の足として利用されてきた、三島と修善寺を結ぶ伊豆箱根鉄道駿豆線。近年では、テレビドラマの影響もあり、駿豆線を目的地とする観光客も増加し、地域との関わりを重視した取り組みにも積極的だ。その仕掛人とも言える中村仁社長にお話を伺った。

—— 業務内容を教えてください。

「いずっぱこ」の愛称で知られる駿豆線が一番有名ですが、電車を中心に、小田原から沼津の間で観光事業や乗り物の経営をしている会社です。

最近では「ごめんね青春！」というテレビドラマで「いずっぱこ」と連呼していたのが、おかげさまで全国に名が知れて良かったなと思っています。

—— 文化活動や社会貢献事業としては、どのようなことをされていますか？

文化活動としては地域の情報発信のお手伝いが主な取り組みです。

地域活動をつなぐプラットフォームとして

様々なイベント、展覧会などの協賛や後援をしたり、駅へのポスター掲示、チラシ

のご紹介などPR活動をお手伝いすることが多いです。

また、今年で38回目を迎える電車内を使った小学生の絵画展や、ラッピングバスで子供たちの活動のPRも行っています。この地域の方々は子供の頃から自動車で移動することが多いので、電車やバスに関心を持ってもらいたいという思いもあります。

毎年11月に「いずっぱこねふれあいフェスタ」を開催しています。もともとは伊豆箱根鉄道を身近に感じてもらうためのイベントでしたが、伊豆の国チアリーディングチーム「パワフルキッズ」の演技など、地元で活動する方々の発表の場にもなっています。

地元ブランドで

地域おこしを

駿豆線沿線には、地ビールやワインを作っている方々がありますし、日本で初めて缶チューハイ「ハイリキ」を作った東洋醸造という会社は、大仁にあったんですよ。そういったことから、地域おこしとして、地ビールやワインが飲めるイベント列車も企画しています。イベントも、できるだけ地元でこだわって、地域で作られたものに関わりたいたいと考えています。

という意味では、他とも明らかに差がつくことだと思います。

—— 個人として興味お持ちの芸術の分野はありますか？

寄席が好きです。伊豆長岡の温泉で時々寄席をやっています。講談や落語は、この地域では聴ける機会が少ないですが、日本の座芸としての大切な文化でもあると思います。

子供が小さいころ落語の絵本を読み聞かせました。3つくらい話を覚えていたら、どこかで話すことが無い時に使えるだろうと思っただけです。本人は、今でも一応適当な話ができるくらいには覚えているようです。そういう文化があることを知る機会が小さい頃からあったらいいですね。

最近三島で話芸の一つ、「ひとり語り」を聴きました。大塚良重さんという伊豆の国市出身の方の芸で、何も見ないで多少の所作とか声色を加えて話すものです。今度江川邸で「垣庵公伝」をやるそうです。

—— 文化を活かしたまちづくりについてどのように考えますか？

例えば、傘がないのに雨が降ってきてずぶぬれになるような辛さは、車の移動ではあり得ませんよね。決して快適ではないけれども、そういう体験は記憶に残ります。

音や香りを感じる

「歩ける街」が好き

バイパスを車で抜けるのは便利ですが、景色はどこも似ていて、車内にいる自分もあまり変わらない。それに「におい」が無いですよ。

街を歩くと感じる「におい」があります。三島だと桜屋のうなぎの匂いなどです。牛がいれば牛の臭いがしたり、そういう「香り」は、人の営みがある印だと思います。例えば千葉の野田市には、醤油の匂いの記憶が残っています。

身体で香りや音を感じられる街というのは、いい街だと思います。だからこそ、その街が歩ける街かというのも大事ですね。歩いていたり、せいぜい自転車くらいでないと、街の香りはなかなか感じられません。そういうまちづくりが出来たら、来た人に文化を感じてもらえるのではないかと思います。

美味しいお団子が刺さる「串」を目指す

我々が串になっていて、美味しいお団子が刺さっていくようなことを目指したいです。秋はたくさんイベントが沿線で行われるので、電車に乗って、ひとりが1日2つ、3つのイベントに参加してもらいたいという思いで、イベントをまとめたチラシをつくってスタンプリーをしています。

異なる市町のイベントや、ある意味ライバル関係にあるようなものでも、一緒に盛り上げる取り組みは、鉄道という我々の商売でこそできることだと思います。

鉄道会社のみならず、様々な業種を巻き込んで、我々がネットワークの端っこについて繋がりをもつことで、地域の面白いことを、地元の人にも、外から来られる方にも体験していただけたらと思います。

—— 三島についてどのような印象をお持ちですか？

縁あって外からやってきて街中に住んでいます。一番いいのは、川がとても身近にあることです。本当に水がきれいですよ。桜川沿いから大社へ続く柳並木の道など非常に良くできていて、歩きやすい街になっている。三島にとって貴重な財産だと思います。

この地域は非常に恵まれていると思います。しかしそれが当たり前になっているの



いずはこねふれあいフェスタでの1コマ

で、その素晴らしいさをうまく伝えられてないと感じます。もっと自分たちの魅力アピールしてもいいのではないのでしょうか。海外の旅行社からすれば、日本各地が「温泉があります、魚が美味しいです、景色がいいです」と言われても、さっきお話をしたのはどこの方でしたっけ？となってしまうっています。

カラーコンテンツをしっかりと示す重要性

この地域のカラーコンテンツは、海越しの富士山です。海外の方はものすごく関心があるし、他地域と間違えない景色です。見た人が忘れない情景の周辺なのだろうことを、ちゃんと理解してもらえれば、源兵衛川なども、多くの人が来るきっかけになると思います。

特にインバウンドを意識した地域活性化



伊豆箱根鉄道株式会社

静岡県三島市大場 300 番地
<http://www.izuhakone.co.jp>

三島企業の考える三島カルチャー」は、「三島の文化応援プロジェクト」が、三島周辺に拠点を置く企業の方々に、三島の文化についてインタビューするシリーズ企画です。配布場所／生涯学習センター、三島市民文化会館、市内文化施設等 詳しくは下記のwebサイトを覗いてください。

次回「小野建設株式会社 代表取締役社長 小野徹氏